

豊南小学校・校長室だより

平成 29 年(2017 年)7 月 14 日
発行者 西山 博章

児童数配布

第 21 号
(通算 107 号)

【特別編】 平和学習のこと… 6 年生の感想、そして思うこと…

前回の校長室だよりで、体育館で聞き取りをおこなった「平和学習」のこと、翌日に「平和学習パート 2」として行った 6 年生が戦争中の食べ物を体験する「すいとん作り」のことを書きました。



実習が終わって子どもたちの感想を読みました、—『今日はすいとんの作り方を教えていただき、ありがとうございました。とてもおいしかったです。戦争の時はこの材料も手に入るかどうか分からなくて、これよりも味が無いといっていたので、戦争の時は本当に大変だなと思いました。…』『…戦争時にどんなものを食べていたのかを知ることができて良かったです。…』『…戦争のときは毎日、しかも 1 日 1 回これだったと聞いて、戦争のときの人の気持ちがわかりました。…』『…いま戦争していないから私たちは、おいしい給食を食べることができるんだと、あらためて感じました。これからも戦争は二度としないようにしないとイケません。…昨日の東村さんの話も、今日のすいとん作りもとてもいい経験になったと思います。…』『…すいとんの作り方を教えていただきありがとうございました。戦争中の食べ物を知ることができてよかったです。食べ物のありがたみがわかりました。…』—これは子どもたちが書いた感想の一部ですが、子どもなりに『平和』『戦争』というものに対する認識を「実感として」少しは感じることができたのではないかと思います。

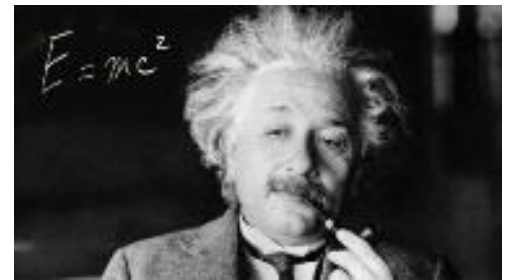
物事を多面的にとらえることはとても大切なことです。修学旅行に向けて 6 年生は社会や総合的な学習の時間などを使い、「歴史的なこと」、「戦争に使われた兵器のこと」、「広島への投下された原子爆弾のこと」等々をグループで調べ、発表をするなかでお互いに学習してきました。

こういった「事前学習」の手法はいろいろな視点で物事を知る効果的な方法です。世界で唯一、原子爆弾(核爆弾)が実際に投下された広島という都市に焦点をあてて、そこから「戦争」について学んでいくのです。調べ学習、グループ学習など多くの時間をかけて学習し「戦争」という行為の愚かさ、残酷さなどを子どもたちに気づかせていくことがねらいです。そして、そこからさらにすすんで、子どもたちが自ら世界に目を向け、そこに根深く残る様々な不条理なことがらに気づくことができようになれば本当の意味で「平和学習」は役目を果たしたことになると思っています。

※久しぶりに両面印刷です

☆☆☆ 「アインシュタイン」を知っていますか？

—昨年、オバマ大統領がヒロシマへやってきました。現職のアメリカ大統領としてまた、原子爆弾を投下した国のトップがヒロシマを訪問したのは戦後初めてのことでした。平和への確かなメッセージを発信し、被爆者の方と対面する光景をご覧になった方も多いのではないのでしょうか。そして、オバマ大統領が平和への願いを込めて折った折鶴は資料館に今も展示されています。以下に記したものは、この投下された原子爆弾にかかわった人の歴史の一端です。ここから、これまでと異なる視点で「平和の大切さ」、「戦争の愚かさ」を捉えていただければと思います。



ヒロシマについて考えるとき避けて通れないのが「原子爆弾」です。広島に投下された原子爆弾を開発、製造したのはアメリカです。しかし、これをつくることができたのは、世紀の天才と呼ばれた「アルベルト・アインシュタイン」(1879 年～1955 年)の導き出した「質量エネルギー公式」とよばれる方程式があったからです。彼は理論物理学という分野に確固たる地位をあたえました。彼の名前を有名にしたのは「特殊相対性理論」と「一般相対性理論」です。この中で彼は、時間と空間に対する概念を大きく覆しました。簡単に言うとニュートン(万有引力を発見したことで有名な科学者です)がつくりあげた自然を支配する理論をくつがえすような理論を発表したのです。このような大胆なことが容易に当時の学会に認められるわけもなく、彼がユダヤ人であったこととあわせて様々な迫害と苦難に直面していきました。

彼の友人である科学者たちの何人かは、自らの発見や発明を「戦争のために」使う道を選び毒ガスなど大量殺戮兵器を生み出しました。しかし、アインシュタインは一貫して「科学者は科学を戦争のために使ってはいけない」という姿勢を崩しませんでした。やがて第二次世界大戦がおこり、アメリカ、ドイツ、イタリア、日本、イギリス、ロシアと世界中の多くの国々を巻き込んで長い、大変な苦難に満ちた紛れもなく「世界」を二分するような戦争がはじまったのです。この中で、アインシュタインはドイツから命からがらアメリカへいわば「亡命」することができました。しかし、アメリカはこの世紀の天才科学者アインシュタインのことを実は快くは思っていないませんでした。

今では「自由の国」とよばれるアメリカですが、当時は決してそうではありませんでした。アメリカに不利益をも

たらずと考えられた者はすべてF B I (連邦警察局)の取り締まりの対象とされました。アインシュタインもその例外ではありませんでした。彼の行動はすべて監視下にあったといえます。

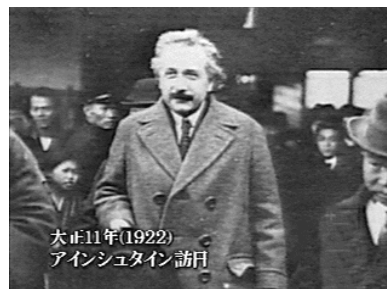
戦争の最終段階に入り、戦争を終結させるための最終兵器として「原子爆弾」の開発が、ドイツ、アメリカ、そして日本でもはじまりました。この爆弾の製作を可能にしたのは先にも書きましたが、アインシュタインが導いた「方程式」です。アインシュタインはドイツがこの原子爆弾の開発をはじめているという情報を得て、当時のアメリカ大統領ルーズベルトに、「ドイツに原爆の完成を許してはならない。ドイツが原爆を完成させてしまうとその爆弾を使ってドイツは世界を終末に導くだろう。そうならないために、アメリカも原爆をドイツより先に完成させなければならぬ。」と進言したのです。抑止力として先に原子爆弾を開発、完成させることを進言したのでした。

これを受けたアメリカ合衆国は、当時の国力(費用も開発にかかわる科学者も)を総動員して原子爆弾の開発にのりだしました。マンハッタン計画です。ふつうに考えると、そのときのアメリカには、この理論を完成させた天才科学者アインシュタインがいるのですから、当然、彼もこの開発プロジェクトのメンバーに入れてより他国より有利に原子爆弾の開発をすすめるどころです。

しかし、アインシュタインはこの開発プロジェクトのメンバーに入ることはありませんでした。意図的にはずされたのです。それは先にも書きましたが彼がアメリカにとって不利益を招く人物と考えられていたからです。この計画の中心となったのはオッペンハイマーという物理学者でした。しかし、彼も原子爆弾の日本への投下によって終戦を迎えてから、ずっとこの原爆開発について原爆など作るのではではなかったと自分を責め続けていたといえます。そして、ついに世界で初めての「原子爆弾」をアメリカが先に完成させました。この頃、第二次世界大戦はドイツが降伏し終結へ向かっていっていました。この状況を見て、アインシュタインは、原子爆弾をドイツより早く開発・完成させることができたが、もう実際に投下する必要はなくなったとほっとしたようです。この原子爆弾の開発は、ドイツだけでなく、ロシアや日本でもおこなわれていました。

しかし、ドイツは降伏したもののまだ日本が最後の抵抗で連合軍を相手に戦っており、それにともない兵士だけでなく一般の国民(女性や子どもお年寄りなど)も戦火の犠牲になっていました。一刻も早く戦争を終結させようとしたアメリカはこの原子爆弾を日本に投下しようと計画をたてたのです。

まさか日本にこの爆弾を使うことなどないと思っていたアインシュタインでしたが、このことを聞き、それを何としてもやめさせようとしてルーズベルト大統領に手紙を書きました。大量殺戮兵器である「原子爆弾」は実際に使うことがあっては絶対にならない!…という強いメッセージでした。



アインシュタインは日本がとても好きでした。大正 11 年にまだ彼がドイツに住んでいたころ、ノーベル賞の受賞後の世界講演で彼は日本にやってきました。日本中 30 数箇所いたるところで熱弁をふるい、彼は自分の「相対性理論」の話をしていったのです。その彼が訪れた日本の都市の中には、広島もありました。彼はこの広島の地をこよなく愛したといえます。広島、そして宮島にも訪れて、音楽(バイオリンを自身演奏しました)を滞在先で堪能することもあったそうです。

そんな彼にとって思い出深い広島でしたが、彼がルーズベルト大統領にあてた手紙は届く前にルーズベルト大統領は亡くなり、アインシュタインの心からのメッセージが入った手紙の封は開けられることはなかったのです。

そして、激動の中、大統領の死にあたってその任を引き継いだ副大統領トルーマンの政権下で原爆投下が決定され、そして 1945 年(昭和 20 年)8 月 6 日午前 8 時 15 分、リトルボーイと名付けられた人類初の原子爆弾が広島市の上空で炸裂し、その結果、一瞬で街をあとかたもなく消して時間はそこから止まってしまったのです。もちろん、この街に住んで、その日、その時刻にいつものように生きて、生活していた人の命も奪ってしまったのです。

この投下の時、アインシュタインはアメリカの自宅でラジオ放送で日本の広島に原子爆弾が投下されたことを知り、深く深く悲しみ、自身の方程式が、このような恐ろしい殺戮兵器を生み出したことに悩み苦しんだといえます。その 3 日後、アメリカはファットマンと名付けられた原子爆弾を長崎に投下しました。

この二度にわたる原子爆弾の投下を受け、日本は無条件降伏し、1945 年(昭和 20 年)8 月 15 日終戦を迎えたのでした。その後、1949 年(終戦から 4 年後)、日本の物理学者である湯川秀樹博士が日本人としてはじめてとなるノーベル物理学賞を受賞しました。彼もアインシュタインと同じく理論物理学者でした。彼がノーベル賞を受賞する前年に湯川博士は大学で客員教授として講義をおこなうためにアメリカに招かれました。そこでまさきに湯川博士に面会に行ったのがアインシュタインでした。そのときすでに 70 歳になっていた世紀の天才とよばれたアインシュタインは、初対面の湯川博士の両手を握り締めて激しく泣き出したのです。そして彼は何度も「原爆で何の罪もない日本人を傷つけてしまった…許してください。」と繰り返しました。先にも書きましたが、原子爆弾はアインシュタインが 1905 年に発表した特殊相対性理論の中で導いた、 $E = mc^2$ という公式を基にした兵器だったのでした。

アインシュタインは晩年、核の廃絶を強く全世界に訴えていくことに力を注いだのでした。

1954 年、それはアインシュタインが亡くなる前年。彼は次のような言葉を残しています。—「もし、私があああのヒロシマとナガサキのことを予見していたなら、1905 年に発見した公式を破棄していただろう」

☆稚拙な文章で読むのが大変だったかもしれませんが、こういった切り口で「平和学習」を改めてとらえなおすとこれまでとはまた違った視点でとらえなおすことができるのではないのでしょうか。何か感じられたことがあると思います。その思いが「平和」への願いにつながってくれば幸いです。To be continued (次号に続きます)